

(前頁の続き) 私たちの宗門は、門信徒一人ひとりに、み教えが受け継がれるという素晴らしい伝統をもっています。これからも、社会の変動の中にあつて、浄土真宗のみ教えや伝統にある多様な可能性を見つけ出し、各人、各世代、それぞれの個性と条件を活かし、特に若い世代の感性と実行力を尊重して、一人でも多くの方を朋とし、御同朋の社会をめざして歩むことができるよう願っております。

後を継ぎます新門主は、築地本願寺で五年九ヶ月の間、副住職を務めて経験を積み見聞を広めています。今後は、法統を護るとともに、宗門全体を思い、広く宗教界を視野に入れて、務めることとなります。皆様の一層のご支援をお願いいたします。

なお、私は、七十歳まであと一年余りとなりました。先のことば予測できませんが、阿弥陀如来の揺るぎない本願力の中に、宗祖聖人のみ教えを仰ぎ、浄土真宗の僧侶としての務めを、できる限り果たしたいと思っています。

二〇一四年
平成二十六年 六月五日

龍谷門主 釋即如

2013年 白道会大会

いのちの根源

—中村薫先生（同朋大学）—

去る八月二十四日と二十五日、蔵本通支坊で白道会大会が開かれました。今年には中村薫先生(同朋大学元学長・現同朋大学教授・大学院教授・文学博士)におこしいたき、二日間にわたり「いのちの根源」をテーマにお話いただきました。以下は公開講演会「まず有縁を度すべし」の要約。

名古屋の同朋大学からまいりました中村薫と申します。「宮市養蓮寺の住職もしております。今回お話ししたいことは「まず有縁を度すべし」ということと、『歎異抄』第五条に出てまいります。「親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏申したること、いまだ候はず。」親孝行のために念仏申したことはない、とんでもないようなことをおっしゃった。いったいどういふことか。その最後のところに「まず有縁を度すべし」とあります。今日はこのことを、私の出あった事柄を通して聞いていただきたいと思ひます。

今日申し上げることは二点ほどあるんですけれども、その一つは、二〇〇四年の七月、大変暑い日でした。私の一番

上の娘が二十九歳で自ら生命を断つてしまいました。結婚して子どももいませんが、家に帰ってきていました。なぜ自ら生命を断ってしまったのか、ひとつには躁鬱という病に苦しんでいました。両極性の躁鬱、躁と鬱が交互に出てきます。たとえば躁になると二晩三晩寝なくても大丈夫。次は激しい鬱。暗い部屋で黙って沈み込んでしまう。怠けてるんじゃないのって言われるけどどうもじゃない、身体が動かなくなる、こういう病気でございます。その中に色んな症状が出てきます。パニック症候群といって、恐怖におののき、いてもたってもいられなく不安が襲ってくる、あるいは分裂してしまふ、言っていることとやっていることが何かが分からなくなつてしまふ等々の病氣、日本には現在三百万人いらっしゃるとお聞きしています。どうしてそうなるのか、脳の病です。状況によって起きてきます。

私の娘は躁鬱で薬を飲んでいたので、五月に薬を飲むのをやめてしまったんです。もつ自分の力で頑張ろうと。こういう行動に出て反動が来ちゃったんです。苦しくて苦しくて、ある薬一